

## 装具に関するアンケート調査 ～退院後の装具使用状況について～

医療法人社団永生会 永生病院 リハビリテーション部

○ 藤原 聡 山下 誠 八木 朋代 角谷 一徳 木野田 典保

### 【はじめに】

当院では適切な装具を処方するために、医師・義肢装具士・理学療法士などが集まり「装具診察」という形で装具を処方している。しかし、入院中に作成した装具が本当に適切であったかどうか、在宅生活においても適合しているかどうかは不明な点が多い。そこで、当院入院中に装具を作製し、現在は在宅生活を送っている方を対象に、装具の使用状況に関するアンケート調査を実施した。

### 【対象・調査方法】

2008年4月から2010年3月の間に脳血管障害で当院に入院されていた方のうち、当院で短下肢装具を作製し自宅退院となった29名を対象とした。調査は2010年8月9日から8月23日の間に、アンケート郵送形式で実施した。アンケートの内容は、退院後の装具の使用頻度と身体状況の変化に関するものであった。装具の使用頻度は、1 いつも使用 2 時々使用 3 不使用 の3項目からなる選択方式とした。さらに、使用頻度の理由を、使用群・不使用群各7項目より複数選択する形式をとった。使用群の理由は、1 安定性が増す 2 痛みの軽減 3 移乗時に使用 4 歩行時に使用 5 転倒予防 6 着用するよう説明を受けた 7 その他 であった。不使用群は、1 着用により痛みが出る 2 身体状況が変化した 3 着用しなくても歩ける 4 新たに装具を作製した 5 誰かに必要ないと助言された 6 装着に手間がかかる 7 その他 であった。また、退院後の身体状況の変化は、1 良くなった 2 変わらない 3 悪くなった の3項目より選択する形式で行った。

### 【結果】

アンケート回収率は29件中20名(69%)であった。対象者20名の内訳は、男性13名、女性7名、平均年齢は58.2歳であった。装具の種類別では、プラスチック短下肢装具(SHB)15名、金属支柱付き短下肢装具(SLB)5名であった。

質問項目の結果は、退院後の装具の使用頻度に関しては、「いつも使用」(9名:45%)、「時々使用」(7名:35%)、「不使用」(4名:20%)であった。装具使用者の理由としては、「安定性が増す」が最も多く(12名)、次いで「歩行時に使用」(11名)、「着用するよう説明を受けたから」(9名)が多くみられた。装具不使用者の理由としては、「装具がなくても歩けるから」(2名)、「誰かに必要ないと助言された」(2名)が多かった。退院後の身体状況の変化については、「良くなった」と感じている人が使用群・不使用群合計で80%を占めた(16名)。不使用群は4名全員が「良くなった」と回答した。

### 【考察】

退院後の装具の使用頻度に関しては、いつもまたは時々使用している人が過半数を占めているものの、使用していない人もいるという結果が出た。また、身体状況の変化に関しては退院時に比べて良くなったと感じている人が8割を占めた。装具使用者は、主に歩行時の安定性を得ることを目的としている。これに対し装具未使用者は、身体機能の向上に伴って装具が不必要となったり、使用頻度が減少していると考えられる。装具を処方する際は、入院中の身体機能の変化だけでなく、退院後の身体状況の変化や見通しも十分に考慮に入れた上で、装具の処方内容や作製時期、処方自体が妥当かどうか検討する必要があると思われる。

今回のアンケートでは、退院後の使用頻度については、装具が退院時にセラピストが説明した通りに使用されているかが不明確である。また、身体状況の変化に関する項目もあくまで主観的なものであるため、客観的な身体状況の調査も合わせて行なっていくことが今後の課題である。